

# 平成23年度 博物館実習報告

## — 受講生のレポートから —

### 博物館の理想と虚像

文09-171 岡田萌愛

博物館や美術館へ足を運ぶことは元からの趣味であり、中高生の頃より同世代の平均からすると結構な回数、博物館・美術館を訪れていたように思う。しかしながら、改めて博物館の内部について詳しく案内して頂いた今年度の経験は、けっして外からではわかり得なかった博物館の実態を未熟ながらも実感できた。

それまで、博物館に関する授業をいくつか受けていて、座学で、なんとなく専門的知識を仕入れていたかのように気取っていたが、実際に内部を見ると自分の見識の甘さを実感せざるを得なかった。学んでいた事柄は、ある意味「そうあるべき」理想型であり、実際の博物館は必ずしもそうはならない。むしろ、学んだ内容にそぐわないケースの方が多く感じられた。

例えば、資料の保存方法である。資料の燻蒸に関しては、燻蒸は行わない方が良いとか、この方法はよくないと様々な事柄を先に学んでいた。最終的に、理想としてはこうあるべき、と教えられた方法を実践している博物館は、見学先にはなかった（少なくとも資料保存方法を教えてくれた博物館の中には）。小さな博物館に限らず、県立博物館のような公的であり、かつ、れっきとした大きな施設であっても妥協せざるを得ない点が生じること。これは考えれば至極当然な話ではあるが、恥ずかしながら見聞の狭い私には想像できなかった。理想はあくまで理想であった。しかし、妥協しながらも理想に添おうとした運営のできている博物館というのはむしろ良い方であった。見学先にはなかったが、自分で入った博物館の中には「博物館」と名のつく施設でありながら、学芸員はおろか、ろくに職員すらおかれず、ほぼ開店休業状態の施設もあった。過去（バブルの頃だろうか？ハコモノが次々と建てられた時期があったと聞く。おそらくはその頃）に建てられ、そのまま惰性で運営を続けている、といった雰囲気醸し出している館もいくつもあった。今年度見た中でもっともひどい館は、資料がケースの内外に（そう、むき出しの資料がいくつもあったのだ）乱雑に置かれ、通路を通過する際、大柄な人間や荷物を持った状態なら不意に傷つけてしまうような場所に、壊れやすい資料（大きな風で、おそらく紙製）が設置されていた。そのような状態でひどく印象に残ったのは、子供でも容易に手が出せる箇所にあった資料に、おそらく若者が書いたであろう落書きがされていたことである。それも、一つや二つではなかった。見た瞬間、「資料の保存」「燻蒸」「保管」「特別収蔵庫」等々、今まで学んだ単語が脳内をぐるぐる回っていた。本当に信じられない光景であったが、かつて授業でも学芸員が配置されず、それどころか職員すらおらず、乱雑に資料をケースに押し込んでいた「博物館」の写真を見たことがあった。悲しいかな、このような状況は全国でも希有なケース、というわけではないのだろう。温

度・湿度の管理、防虫、防黴、使用する薬品など、博物館における資料の保存には気をつけなくてはいけない点が多く、そのどれを怠っても資料に悪影響を及ぼす。博物館は保管施設であり…

という内容を必死にメモに取った。留意する点が多く、下手をすると高松塚古墳のようなケースになってしまうかもしれないから、学芸員は責任ある仕事だ、大変だななどと思っていた状況はぬるいものであった。事実として、このようなケースがあった。もはや自分の学んだ内容以前の状況だった。あの施設にあった資料はどうなるのだろうか。保存環境は最悪と言わざるを得ない。だが、対処する者がいない。行政の判断で処分される時を待つのみであろうか。

大阪府においては、橋下前知事により博物館・美術館は大いに揺らいだ。先日も、知事から大阪市長に就任した橋下氏が美術館をどうするか云々でニュースが流れていた。それを見て、父が「美術館なんざいらん、収蔵物を置く場所がないなら売り払えばいい、何のための美術館だ」とこぼした。「何のための美術館だ」とはこっちの台詞である。まず資料を保管し、次の時代にできるだけ状態を維持したまま伝えていくのが博物館・美術館の最たる役割ではなかったか。展示することは文化的に有益であるものの、資料を確実に傷めてしまうので、常時展示するわけにはいかない（もっとも常時すべての資料を展示するスペースなどあろうはずもないが）。ましてや売り払ってしまったら、その後の資料が分散して行方が分からなくなってしまう。思わず「保管するのが第一目的だからそれはおかしい」と反論すると「誰も見ない物を後生大事にしまっておいて何の得になるんだ」と返ってきた。一般の目線から見た博物館・美術館の立場とは、すなわちこういうことなのであろうと悟った。

「保管」という行為は即時的な利益行動ではない。目に見えるわかりやすい利益ではなく、かなり長期的な視点をもってそのありがたみが分かる。こういった行動を文化的側面において行使できるのは公的機関において他ならない。「公」であるからこそ、こういったことができる。短期的に損得を見る民間にはできない行動である。しかし同時に、人々に理解されづらい。おそらく大多数の人間にとっては無益な行為にしか見えなだろう。ただでさえ公的な事物に対する不信感が募る昨今、人々に理解されて受け入れられなければ、この先続けていくことは難しい。「博物館は変わらなくてはならない」といった趣旨の言葉を幾度も聞いた。いま博物館の立場は大いに揺らいでいることを、肌で感じることができた。

博物館に対する視点はこの1年で大きく変わった。運営など、内部に関するものもそうだが、自分が体験してみて初めてその大変さが分かったことがある。実習展における展示である。それまで博物館の展示は、いわば最終形態のみを見ていて、そこに秘められた苦労など想像もしていなかった。上っ面をなでて、そういうものかと納得したような体で満足していた。しかし、自分が改めて展示する側にまわったとき、想像を絶する苦心が待っていた。

まず、テーマが定まらない。我々はまず自分たちで借用できるか、資料を揃えられるか、といった点で苦労したが、これが本当の学芸員なら、借用のリスクは比べものにならないし、動く金銭の額や責任、意義や、集客が見込めるかといったプレゼンもあるのだろう。それに比べれば遙かにたやすい条件であるはずだが、それですら難航した。実際になんとか展示の作業に入れたあとも、ネコの手も借りたい状況であった。手探りで不完全なまま模索し続け、本当に展示できるのか猛烈な不安に襲われた。私はキャプション・パネルを担当したが、実際に記載する文章の配分や、内容の添削、複数人から寄せられる文体の統一、パネルのデザイン（余談だが、センスと

無縁な人間である自分にとっては、パネル関連の作業の中ではある意味でもっとも難航した作業であった) 諸々、睡眠時間は日々削られ、人間関係も複雑になり、班員の半分の人相が豹変していった。同一事項について同一人物に質問した際に得られた返答の内容が毎回ことごとく変化していくことに耐え難き憤怒を感じたり、副リーダーの目から日々生気が消え、リーダーに至っては歩行の際、不穏当な表現モーションで移動していたり、皆が皆極限を迎えていた。個人的に驚いたことには、いわゆる図画工作的な作業が予想を遙かにしのいで多かったことである。パネルも、業者に発注した物はみごとな出来であったが、自分たちで制作したパネルはやはり少々みすぼらしかった。しかし、予算がないなら自作するしかない。かつて自分が見た展示の中で、「なんかしょぼいなー、もっと頑張ればいいのに」などと軽々しく思ったことが、いかに残酷であったかを実感して悔いた。学芸員とは研究者ではなかったか、何故こんな単純作業をしているのかと自問することもあったが、実際問題、労働するというのはすなわちそういうことなのであろう、などと霞がかった頭で薄らぼんやりと考えた。そして、ふと気付いた。自分たちの班は10人以上いた。だというのに、まだ人員が足りない、人手が欲しいと感じる。今まで行った博物館はどうだったか。天神橋筋六丁目のくらしの今昔館は学芸員は3名と言っていなかったか。確か1名という所もざらにあるはずだ。10名以上抱え込んでいる館となると全国でも僅かではないだろうか。再び学芸員の実態にめまいがする思いだった。

展示が無事に(だと信じたい)終わると、博物館に自分から行く気が綺麗に消えた。やる気がなくなったとか、博物館に対する興味が失せたということでは一切無い。恥ずかしくてたまらないのだ。自分たちのような若造とプロの学芸員を比較すること自体がそもそもおかしいが、実際に展示を経験してしまうと、他の展示を見れば自分たちの展示の稚拙さにいたたまれなくなってしまふ。今まで軽くながすように見てきた数々の展示の裏側がいかに苦労を積まれた物であったのか、その片鱗に触れ、恐れ入ると共に恥じ入るばかりである。しょっちゅう今まで行った展示の図録を読み返してきたが、それも展示が終わって以降触れられないでいる。どうしても、自分たちの図録のレイアウトや文章のチョイス、写真などが浮かんできちゃう。と、同時に「次はこうしてやろう」「今度は、こんな失敗をしないようにしよう」といった次回に対するやる気が生じているのも事実である。あんなに大変だったのに、かついまだ恥の感情が抜けないでいるのに、我ながら不思議なものである。

これから博物館がなすべき事、学芸員に求められることは今まで以上にハードルが上がっている。もはや今までと変わらぬ姿勢を続けることは破滅への歩みである。しかし、その「今までと変わらぬ姿勢」も決して怠惰なものではない。それどころか、かなり業務が多い。先頃見た「博物館のあるべき姿」からかけ離れた博物館をただ一方的に責めることは、もはや心情的にできない。やるべき業務に対して学芸員の数は少なく、負担は大きい。なんとかやっていくだけでもいいばいばいな場所も少なくないだろう。しかし、だからといって妥協を許してはならない。これから博物館の形態が変化していく事は間違いない。ならば、先人達の失敗からできる限り学び、同じ轍を踏まぬよう心がけねばなるまい。この一年の実習がもたらしてくれたかけがえのない経験を元に、いかにそれを活かすべきかは、これからの自分の行動にかかっているのである。

### 博物館実習の履修にあたって

1 回生の頃、私は自分の将来について、ほとんど何の夢も目標も持てずにいた。それは今でもさほど変わらないのだが、まあとにかく、不安だった。得意だった英語は高校で自分よりも国際的な感覚を持つ人を見て熱が冷め、絵の道も飽き性ゆえに中途半端。小説を書いてみても途中で止まり、楽器をやっても練習嫌いで続かない。その頃周囲では友達が教職課程や司書課程、学芸員課程の科目を履修し資格取得を目指して頑張っていた。最初は特にやりたくもない職業の為に資格をとる必要もないだろうと思っていたのに、だんだん自分も何かしないとおいでいかれるのではという錯覚に陥った。教員にはなりたくないし、司書も漫画のような本しか読まない自分には向いていないと思った。そこで学芸員という選択肢が残った。よく知っているわけではなかったが、歴史学を勉強しようとしていたし、将来そういう仕事に就けるかもしれない。必要な単位を修得するだけで資格が貰えると知って、これならと思い挑戦することにした。

実際に学び始めると、期待を裏切られる情報が多々入ってきた。学芸員とは、資格を取っても大学院に進学し、さらに運と実力がなければ減多になれないものだという。実際にやらなくてはならない仕事や身につけるべき知識は膨大で、日本の学芸員は雑芸員と呼ばれているということ。そして、3 回生で履修しなければならない博物館実習では、鬼のような先生方のもと、恐ろしくきつい実習展示をおぞましく因縁渦巻く班員たちとしなければならない、ということ。

だが、そんな脅しともとれる情報を聞いても私が学芸員資格取得を途中で諦めず、博物館実習を履修した理由があった。頑張りがかったのだ。部活動は写真部で、展示の時以外にそう頑張ることもない。勉強もそこそこやればそこそこの成績が取れたし、特に熱中するというほどでもなかった。アルバイトもその時は週に一度しかしていなかったし、ボランティア経験もない。日々、これでいいのかと思いつながらなんとなく生きていた。だから、何か一つ、頑張りがかった。少し大げさに言えば、生きている実感が欲しかったと言っていいかもしれない。また、実習展は学生自らが企画・運営する本格的なものだと聞いて、将来企業に就職し、何か企画を任された時に向けての経験にもなると思った。それに、資料の保存や人との付き合い方など、様々なことに神経を使う学芸員の仕事を学ぶことは、気の回らないタイプの私にはいい勉強になるだろうと考えた。一度に複数のことを考えるのが苦手なので、今後困ることが多いのではと心配していたのだ。

こうした理由から、私は博物館実習を履修することにした。不安は大きかったが、これから何がおこるのか、わくわくする気持ちもあったと思う。

### 実習展について

実習展については、はっきり言ってもう思い出したくないというのが正直なところだ。いい友人はできたが、展示は不完全燃焼で、後悔が強く残るし、何より準備期間の心労を思い出すと今でも心が折れそうになる。なまじ責任感だけは強い根が真面目な私が班長を務めるとどうなるのかよくわかった。とは言え、仕切りたがりでもあるし、態度はでかくいる方がどう考えても性に合っているのだから、ポジション的には嫌いではないのだが。

しかし今回は、企画も資料集めも殆どワンマン状態でやってしまった感があるので、余計にしんどかった。これまでも大勢のまとめ役を務めることは何度かあったので、上に立つ者は過度にメンバーに期待してはいけないという諦念は最初からあった。また、「人を自分の物差しで測ってはいけない」という言葉が好きなので、思い通りにいかずとも、どんと構えていなくてはどういう覚悟もあった。だが、知らない者同士の班で、初めて挑戦するこうした本格的な企画においては、思った以上にこの孤独がこたえた。まず、展示テーマの案がまとまらない。思いついては他の班や最近の展示と被り、取りやめになった。最終的にテーマが決まったのは合宿の時のことで、案を考えてきたのはほぼ私一人だった。そうしてなんとか合宿中にテーマと題名が決まり、資料を集め始めた。仕方が無いとはいえ、我が家のものばかりだった。秋学期が始まってすぐ展示ケースのサイズを測った。巻尺を持ってきたのは私一人だった。企画案を書くのも殆ど私一人の作業だった。締切当日になって一人では手に負えないと悟り、急遽二人のメンバーに来てもらってなんとか時間ぎりぎり提出した。最終的な展示構成も殆ど最初に私が考えたままだ。ミーティングのスケジュール設定を班員の一人に任せるところ、必ず私が参加できる時間帯に設定してくれた。だがこれもつらかった。他の班員は何度か参加できないことがあるのに、私は休むことを許されない。しかし、班長として、展示企画者として、資料担当者として、常に参加して状況を把握しなければという責任感もあった。だから、何度ボイコットしようと考えても、それはできなかった。インタープリテーションの対策も私が考えた。説明するといいいと思われることをまとめてメールを回した。

準備期間全体を通して私の中にあっただのは、「いいのか、これで」という不安だった。私の考えた企画、我が家から持ってきた資料、私の決めた展示構成、これでいいのか。本当にメンバー全員がこの企画を良いと思ってやっているのか。これではまるで私の独断専行ではないのか。だが、誰かが動かねば何も進まないという思いも強くあった。その誰かは、リーダーたる私であるべきだとも思った。

自分と班員たちとの気持ちの落差を感じることは常だった。自分だけが焦っているように思えた。全て自分のせいなのだと思うこともあった。案が出てこないのは、自分がいつも先走って提案するせいだとか、自分の説明が足りないからだとか。自分が信用されていないから、人が思うように動いてくれないのだとか、自分が的確な指示をださないばかりに展示の質が落ちたのだとか。頼るのが下手だとも思った。頭の回転が鈍いとも思った。発想力がないとも。思いつく限りの自分の落ち度を探した。もちろん真実も多くあっただろうが、それにしてもその時の自分は悪い循環に陥っていた。ようやくそこから抜け出したのは、他のメンバーも焦り始め、ストレスを溜めながらも実際に形にしていく作業に入った頃だった。

さらに私は、班内の雰囲気調整し、いい空気の中で話し合い、作業するように導くのもまとめ役の自分の仕事だと考えていた。初めに先生方に脅されたような、ギスギスどろどろした雰囲気には、うちの班は絶対にさせないと誓っていた。そのために、合宿も皆で新幹線に乗り、班全員で同じホテルに泊まるようにしたし、私が写真部で初めて同回生と心から打ちとけた合宿を思い出し、お酒とおつまみを買ってあさってのトランプ大会も実施した。集まった時はどんな嫌な気分を抱えていようと、ユーモアを忘れなかった。どうしても真剣で張り詰めた空気になってしまうミーティングでは、時折冗談を言ったり、変な声を出したり、威勢よく発破をかけたりと、緊

張感をほぐすよう努めた。

そんな、私にとって心労の非常に多い実習展ではあったが、その心労を和らげてくれるのもまた、班員であった。「私はあんまり力になれてないけど、愚痴ならいくらでも聞くから、なんでも言って」と言ってくれた友達。「きみはよく頑張ってるよ」と事あるごとに飴や飲み物を差し入れてくれた友達。そして、実習展最終日の打ち上げで、メンバー全員から、と貰ったりラックスお風呂セット。悩み苦しみながらも、堪えてきた甲斐はあったと思う。

ここにきて打ち明けるが、私は男性が苦手である。せっかく男女比が半々の班になったのだから、これを機に克服しようと努めたが、苦手なものはそう簡単には直らなかった。そんなストレス溢れる日々の中、色々よく頑張ったと自分を褒めてやりたい。

### **実習全体を振り返って**

博物館実習の授業では、普段体験できない文化財保存に関する実習や、専門家の方のお話を拝聴する機会、博物館のバックグラウンドを知る機会などがあり、私の知的好奇心はおおいに刺激された。実習展では、まるで怪我をして自分の皮膚から血が流れるのを見たように、生きている実感を感じられた。得難い友と、得難い経験、得難い悔しさ、得難い苦しみを得て、私は少しだけ、成長した気がする。私が今後学芸員として働くことはまず無いと思うが、それでもこれから私の人生に起こる全てのことに、この記憶を活かしていければと思う。

学芸員という仕事は専門職であり、長い経験と実績によって培われる仕事であることは明白である。今日の日本の博物館にあつては、ある一分野だけの専門家であるだけでは許されない。作品に対する研究者であり、保存や修復に関する知識、作品取り扱いのエキスパート、さらには写真撮影の技術など、さまざまな知識と技術が要求される。すべてについての能力が要求されるが、得手、不得手があることも確かである。ただし、常識として最低限の知識は必要となる。そして、知識で覚えるというよりも体験によって修得していくもので、作品の取り扱い、展覧会の構想や出品依頼など、どんな仕事も経験に裏づけられなければならない。

ここで、作品の保存と修復について考えると、作品の保存のためには修復がつきものである。長い年月を経た作品も多く、これからも永久に残されていかななくてはならないからである。伝統的な日本美術だけでなく油彩もヒビ割れたり、亀裂が生じたり、キャンバスが波打ったりとさまざまな状態に見舞われる。いずれも適切な修復が必要となる。そして、修復は作品に応じて専門業者に依頼しなくてはならない。乾燥、虫害、カビ、物理的力など、さまざまな要因によって作品が傷つけられる。展示や貸し借りなど作品を取り扱う機会があれば何らかの損傷が想定できる。しかしながら、そのような事故が全く起きないように取り扱いには万全を期さなければならない。

私は、大学生になって四国から関西に引っ越してきたということもあり、以前よりも博物館や美術館を訪れることが多くなった。そして、大学での芸術学美術史や博物館実習の授業を受けることで、さらに博物館・美術館や学芸員という仕事について興味を持つようになった。そうしていく中で、修復の分野において最近、私が疑問に感じたことがあったので、そのことについて書きたいと思う。それは、昨年京都市美術館で展示されたヨハネス・フェルメールの《手紙を読む青衣の女》についての修復である。この修復は、この作品を所蔵している、アムステルダム国立美術館が強く希望していた。そして、修復後初公開ということもあって、私はとても期待してこの展覧会を訪れた。しかし、実際観てみると少し残念に感じてしまった。展覧会を訪れるまでは、本や画集を観ていただけだが、私の中のこの作品のイメージは、絵全体が光に包まれていて、柔らかな雰囲気の商品だと思っていた。しかし、実際に観た《手紙を読む青衣の女》は、特に注目して修復したと思われる青（ラピスラズリ）がとても鮮やかで、全体の柔らかさが、あまり感じられず、青の部分にばかり焦点がいったしまった。フェルメールブルーは有名だが、この作品でここまで鮮やか過ぎると、逆に全体の雰囲気が崩れてしまうのではないだろうかと感じた。この展覧会を訪れて私が強く思ったのが、修復するということは本当に必要なことなのだろうか、ということだった。確かに、作品をきれいにすることは悪いことではないと思うし、描かれた当時の状態を観てみたいと思う部分はある。しかし、オリジナルの作品に誰かが手を加えるということは、本当に良いことなのだろうか。私が感じたように、絵の雰囲気やオリジナリティが失われてしまうのではないだろうか。大きさに言えば、描いた画家以外の誰かが手を加えた時点で、贋作のようなものになってしまうのではないかと考えた。小説家の有吉玉青さんが言っているように、「絵も人と同じように歳月や事件を経験してゆく。日々呼吸をし、乾いたり湿ったりを繰り返

返して老いてゆく。色も変わるだろう。また愛されて大切に保管されている絵もあれば、放っておかれて徒らに傷んだり、ときには誘拐されるという運命をたどる絵もある。…修復を拒んだ絵は確かに汚れているが、思えば300年以上も前に描かれたものが、描かれた当時のままであるはずがない。修復されないものを見るのは、その絵が経てきた時間や出来事を追体験することになるかもしれない。私も、この考えと同じで、時代と共に劣化するというのも作品の生きた証で、その劣化も含めての作品ではないかと思っている。

私は、この展覧会においては、修復という作業は反対だと感じた。でも、「今は修復直後だからであって、時間が経てば馴染んでいくのではないか」という意見もあり、言われてみれば、そうかもしれないと思った。しかし、私は修復についての知識は、ほとんどないので、修復について学んでから、もう一度、この修復について考えてみようと思い、まずは図録を読んでみた。そうすると、アムステルダム国立美術館が修復を望んだ理由は、酸化が進みムラが出て黄ばんだワニス、古くなって変色したりタッチ、補彩、作品下部の行き過ぎた処置、あるいはまた、特に画面左側の明るい壁や女性の青い上着に見られる無数の小さな剥落などによって、制作当初の澄んだ青の色合い、精巧な細部、全体の明晰さが損なわれている、ということからだった。

そこで、まずワニスの除去をするために、もろい画面との物理的な接触を最小限に抑えるように有機溶剤で行われた。そして、ワニスを除去してからは、作品の周縁部のリタッチと補彩、および作品下部の損傷を覆っていた補彩の一部も除去できるようになった。けれども作品下部の大きな損傷に残ったオリジナルの絵具を覆う補彩や行き過ぎた処置については、溶剤で除去することができず、顕微鏡を見ながら手術用のメスで丁寧に削り取らなければならないものもあった。この大きな損傷やその周りには、少なくとも6種類の異なった充填剤が認められ、過去に何度も修復されたことは明らかだった。いったん作品が洗浄されると、下部の古い剥落がはっきり見えるようになった。また、多数の小さな穴がいかにも作品の見やすさを妨げているのかも、はっきりした。このような軽微な損傷は目につかないようにする必要がある。そこで、剥落の充填、つまり穴埋めの「具」としても役立つグアッシュ（不透明水彩絵具）でそれを行うことになった。穴が小さかったので、この部分の修復も顕微鏡を使って行わなければならなかった。そして、修復の最終段階に取り掛かる前に、色を十分落ち着かせるために安定した合成ワニス塗られた。このワニスを施すことによって、小さな穴や膨らみで不均一な表面はある程度滑らかになった。修復の最終段階では、損傷を目立たなくし、イメージの明晰さを取り戻すために、安定した合成樹脂に薄い顔料を溶いたものが塗布された。結果、《手紙を読む青衣の女》における調査と修復によって、フェルメールの構想以来、この作品が過酷さに耐え、幾度にも亘る修復を受けてきたことが明らかになった。

そして、私が、今までに本や画集で観ていた作品自体も、既に修復が施されていて、フェルメールが描いたそのままの状態ではなかったということが分かり、少し戸惑った。でも、今回この展覧会で、感じた違和感（全体の色のバランス）、それを感じ、やはり修復には、あまり賛成できない、と思った。今、修復されてしまっているものは、有吉玉青さんの言葉に置き換えて「その絵が経てきた時間や出来事」として、これからはなるべく修復しないで良いように保存状態を良くし、大幅に修復するのではなく、もとのイメージを壊さない範囲内で、そして、痛みがひどい作品については、最低限の補修だけを行うべきだと感じた。これらの考えから、私が学芸員にな



れば、あまりにも破損・損傷がひどい作品以外に関しての修復には反対と思う。だから、修復をできるだけ必要としないようにするためにも、保存科学の方にも注目したいと考える。

そこで、作品を保存するにあたっては、アルカリ・温湿度・照度などについて基礎的な知識と経験は学芸員ならば心得ておくことが大事である。そしてさらに、自分自身が計測し望ましい環境をつくり上げなくてはならない。建築家や設計者の理論や計算通りには必ずしもならないことをよくわきまえておくことも必要である。場所によっては、特に梅雨から夏までの湿度を希望通りにすることが難しい場合もある。博物館の保存環境を考えるにあたって困難なことは、相手が大きな建物であること、そして空調機によって室内の環境問題を克服していかなくてはならないことである。さらに一年の周期によって、状況がどのように変動するのかをよく見きわめることが必要である。部分的に除湿器を置いたり、調湿剤（ニッカペレットやアートソープ）を使ったりして何が一番適切となるか実験を積み重ねていくことも重要である。

そして、最後に言えるのは、大学生活の中で様々なモノに対する見方が変わってきたということである。その中でも特に、生活する上でも注目するようになったのが美術・芸術関係である。また、博物館実習展によって、学芸員が企画して展示するまでの過程が、予想以上に大変な作業であると学ぶこともできた。様々な機関に連絡・交渉するということは、今までなかなか経験することがなかったので、初めは戸惑ったこともあったが、そうしていく中で、少しずつ慣れてきた。今回の実習展では仲間とのぶつかり合いや、すれ違いもあったが、今ではそれも良い経験・思い出であり、大切な仲間もできた。また、訪れてくれた多くの人に解説をしていくことで、自分の言葉にも自信が持てるようになり、人とのコミュニケーションに楽しさを感じることもできたと思う。そして、展示においては直した方が良かったと後々思う部分もあったが、失敗した部分があるからこそ気づくのであって、もし次企画を立てる機会があれば、経験を活かして自分の意見を言って、より良いものにしていきたいと思う。この経験の積み重ね、すなわち最初に述べた「学芸員には経験が必要である」という言葉を改めて実感した。だから、これからはこれらの経験を活かしていきたいと思うし、美術・芸術に少しでも多く関わっていく人生にしたいと思う。

#### 【参考文献】

- ・『学芸員になるには』 深川雅文 ペリかん社 2002
- ・『美術館学芸員という仕事』 日比野秀男 ペリかん社 1994
- ・『フェルメールからのラブレター展』 京都市美術館 2011
- ・『フェルメール―生涯と作品―』 小林頼子 東京美術 2007
- ・『恋するフェルメール』 有吉玉青 白水社 2007

## 『かな讀八犬傳』にみる和傘による演出

和傘班 社09-0590 嶋本みどり

### 要約

「和傘—日本人の心—」で展示された『かな讀八犬傳四編』表紙には設定と矛盾する雨と傘が描かれている。この点について実習展においては明らかにはされなかったが、これを描いた歌川国芳には何らかの意図があったと仮定した。三編表紙を中心とした『かな讀八犬傳』及び原作である『南総里見八犬伝』の記述を検討した結果、表紙の傘と雨は作中に登場する宝刀村雨に対する演出として描かれたものである可能性が示された。

### 問題と目的

実習展を終えて実感したことは、展示解説における来館者からの疑問を解決することの難しさである。図録の制作や展示では展示を行う側の知識や都合に合わせて行うことができても、来館者の関心は何事にも束縛されない。来館者の疑問にその場で答えることができなかつた場合、次の機会は与えられず、また解説の誤りを訂正することもできないので、曖昧な情報を伝えることがあってはならない。展示した資料に関する情報は班員間の共有こそ十分行われていたと言えるものの、経済や外交、歴史について他の要素が絡めば途端に手に負えなくなることは明らかだった。実習展中には日誌を用い、各解説担当者が受けた質問内容と対応について情報を共有したが、やはり的確な回答が用意できなかったケースが存在した。その多くは事前に知識が不十分と自覚していたものではなく、解説者側が想定もしていなかつたような質問であった。展示が来館者に及ぼす効果と定義するとすれば、それは認知構造の変化である。同じ展示を見ても各来館者の認知構造の変化は実に多種多様である。筆者自身を一人の来館者と位置付けて「和傘—日本人の心—」を振り返ると、やはりいずれの来館者とも異なり、且つ、一解説者として回答できない疑問が生じる。

「和傘—日本人の心—」では和傘の歴史に関する資料として、二世爲永春水著、一勇齋国芳（歌川国芳）画『かな讀八犬傳四編上』『かな讀八犬傳四編下』をそれぞれ展示した。「圓塚」の場面を描いた表紙となっており、二冊の表紙を並べると一枚の画となる（図1）。雨の中番傘を差した八犬士の一人が描かれていたことから、江戸時代に庶民に普及した番傘について示す上で用いられた。しかし、この画には不自然な点がある。この場面で雨は降るはずがないのである。舞台設定は月夜、かがり火の光に互いの姿が照らされることを前提に成り立つ筋書きである。加えて、同じく『かな讀八犬傳三編上』『かな讀八犬傳三編下』表紙でも圓塚が描かれているが（図2）、こちらの表紙から国芳がそうした舞台設定を把握していたことが伺える。本報告書では実習展においては触れられなかったが明らかにはされなかつた疑問について考察を行うことを目的とする。

### 描かれた圓塚における場面の特定

嘉永元年（1848）から慶応二年（1866）に刊行された『かな讀八犬傳』は、文化11年（1814）から天保13年（1842）にかけて刊行された曲亭馬琴の著作『南総里見八犬伝』を、二世爲永春水



図1 『かな讀八犬傳四編上』『かな讀八犬傳四編下』

資料参照先：早稲田大学古典籍総合データベース (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>)



図2 『かな讀八犬傳三編上』『かな讀八犬傳三編下』

資料参照先：早稲田大学古典籍総合データベース (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>)

とそれを引き継いだ曲亭馬琴の妻、鳳蕭庵琴童が大眾向けに書き直したものである。

三編、四編の表紙に描かれているのは、夜であること、そこに一人の女が倒れていること、かがり火が見られること、朱鞘の太刀を佩き、鎖を着込んだ本文に合致した姿の犬山道節が描かれていることから圓塚山での騒動を描いたものであると特定できる。「圓塚」では、犬塚信乃、犬川莊助に続き、三人目の犬士である犬山道節が登場する。犬塚信乃の留守中、信乃の許嫁である大塚家の養女濱路が浪人網干左母次郎に攫われる。大塚家の下人であった犬川莊助が後を追うが、圓塚山のふもとで追い付いたときには濱路は左母二郎に瀕死の重傷を負わされており、左母二郎は偶然その場に潜んでいた濱路の兄であり、八犬士の一人でもある道節により倒されていた。道節は左母二郎が信乃から盗んでいた宝刀村雨を手にしており、事情を知ってなお宝刀を我が物にし



図3 『かな讀八犬傳五編上』に見られる土田土太郎  
資料参照先：早稲田大学古典籍総合データベース (<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>)

ようとする道節と莊助が刃を交える、という場面である。

『南総里見八犬伝』における圓塚に関する記述からは舞台が以下のように特定される。日時は文明10年（1479年）6月19日、「初夜過ぎて」、「初更過ぎたる頃」という記述が見られることから午後八時頃以降ということが分かる。また、「十九日の月出て」とあり、空は晴れている。場所は武蔵国豊島本郷の西にある圓塚山のほりとなる。

さらに、三編と四編の表紙に描かれた五人の人物を見ると人物の特定及び場面の詳細な特定が可能になる。まず、圓塚山のふもとにいる女は攫われてきた濱路一人なので、四編右下の女は濱路である。濱路の生存中に二人の男が対峙する場面は二回、それぞれ左母二郎と犬山道節、あるいは左母二郎と追手の土田土太郎という組み合わせとなる。しかし、三編表紙右の男の伸びた月代と朱鞘の太刀から、この男が犬山道節であると分かること、さらに五編上巻一丁裏を見ると（図3）、同じ構図で土田土太郎の姿が描かれていることから、四編表紙の二人の男は左が左母二郎、右が土太郎であると分かる。また、圓塚において道節と対峙した男は左母二郎と犬川莊助の二人であるが、左母二郎は四編表紙に異なる姿で描かれていること、道節は左母二郎に対して刀を抜いていないことから、左の男が莊助であると分かる。

以上の事から、四編の表紙は月夜の圓塚山のほりを描いたもので、刀を抜いて向かい合うのは浪人網干左母二郎と追手の土田土太郎、そして刃を避けるように地に伏すのが左母二郎に攫われてきた娘濱路であることが示された。

### 「番傘」と寶刀村雨の関係

四編表紙は三編とは異なり、縦に灰色の線分が繰り返され、雨が表現されている。しかし、この場面では月と燃え残った火の光を照明として物語が展開するため、雲が月を隠したり、火を消しかねない雨が降ることは有り得ない。左母二郎に追い付き、叔母夫婦の刀で斬りかかったはずの土太郎が傘を指しているという点も奇妙である。月夜の圓塚山でなぜ土太郎が番傘を差してい

るのか、雨が降っているのかという点については、画面中央に見える網干左母二郎が手にする刀「村雨」との関連を指摘することができる。

村雨は本来八犬士の一人犬塚信乃の刀である。信乃の祖父大塚匠作が仕えた家に代々伝わる宝刀であり、裏切りにより城が攻め落とされた際に、敵に奪われることを防ぐため、信乃の父大塚番作により持ち出された。この刀には殺気を含んで抜かれるとき、刀身に水滴り、人を斬り刀に血が付着するならますますほとぼしり、その血を洗い流すという力が付与されている。匠作はこれを「村雨の葉ずゑを洗うに異ならず」と表現している。左母二郎は、信乃を疎ましく思う信乃の叔母夫婦と結託し村雨を別の刀とすり替えた後、さらに自分の刀とすり替え、叔母夫婦にはこれを村雨と偽って渡すことで村雨を手にしていった。土田土太郎との戦闘においては、左母二郎は自身の刀ではなく村雨を用いたこと、この際村雨から水がほとぼしったことが本文中に明記されている。また、四編表紙を見ると画面の中央に村雨が描かれ、三人の視線が直接村雨に至るものではないが、いずれも画面中央に向かっていることが分かる。これにより、見る者の視線も画面中央にある村雨に誘導される。ゆえに四編表紙は村雨を中心として描かれたとするならば、村雨の力を表現する番傘と雨が描き込まれたと考えることができる。

### 総合考察

歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」においては、明和三年、時代遅れの蓑笠の山賊姿であった定九郎を、破れ蛇の目傘に五分月代の鬘、黒羽二重の単衣に白献上の帯、朱鞆の大小、腕まくり尻からげ、手も足も真白塗りという、当時の江戸市中で非行を働く浪人者の姿そのままに演出した初世中村仲蔵の公演が歴史に残った。また、「助六由縁江戸桜」では花川戸助六が雨も降らないのに蛇の目傘を差している。これは、花川戸助六が曾我五郎時致であることから、曾我兄弟仇討ちの日が雨天であったことにちなんだ演出である。

『かな讀八犬傳四編』表紙である圓塚の場面において雨と傘が描かれる矛盾は、歌川国芳よる村雨にちなんだ演出であると考えられる。このような場面における和傘には送り手の意図を運ぶ媒体としての役割が与えられている。

### 参考文献

三浦理編（1912）南総里見八犬傳壹 有朋堂書店

国立劇場調査養成部芸能調査室編（1989）国立劇場上演資料集〈166〉仮名手本忠臣蔵〔五段目・六段目〕 国立劇場

# 情報発信の必要性和入館者増大のための提案

機09-0142 西岡真優

## 1. 緒言

年々博物館に対する風当たりは厳しくなっている。最近では、博物館不要論まで飛び出し、予算は縮小される一方である。これに立ち向かい、予算増大につなげ入館者を増やすためにはどうしたらよいか、どれだけ博物館が必要か主張しても、実績が伴わなければただの机上の空論であり、社会ではなかったことにされてしまう。そこで、理想論になりがちな博物館必要論の課題および入館者増加の提案について検討、考察を行う。

## 2. 現状と課題

では、博物館不要論の根拠とは何であろうか。

- ・経済性の悪さ・収益の少なさ
- ・展示がつまらない（見に行く気になれない展示）
- ・博物館そのものに対する悪印象

ざっと考えつく限りをあげてみたが、そのどれもが根源に博物館に対する理解不足・無関心があると思われる。またその原因として、博物館の広報不足、教育普及活動の遅れ、博物館側の分かる人に分かってもらえれば、という努力放棄、研究・保存活動を重視した運営などがあげられ、完全解決には長い期間を要する。

次に、博物館必要論の根拠とは何か考える。

- ・博物館とは子孫に文化・伝統を残し伝える場所である
- ・生涯教育に必要
- ・研究活動の場

代表的なのはこのあたりであろうか。確かにどれもが尊いことである。しかし、どれだけ尊くても情報発信せねば、ただの「ハコモノ」に成り下がるのも目に見えている。人間は他者とコミュニケーションをとることで社会に受け入れられ成長できる。博物館とて同じことであろう。社会の中で成長したいのならば他者へ積極的に情報発信しなければならない。

事実、博物館関係者が情報発信を積極的に行わなかったために今の惨状がある。

以上より現状での課題とは、博物館から社会に向けての積極的な情報発信と考えられる。

## 3. 解決策と妥協点

課題が分かったところで、次に考えるべきは解決策である。どうすれば具体的に博物館の役割や必要性を理解してもらえるのか、分かりやすいよう吟味する必要がある。

まずは「何」をわかってほしいかであるが、どうも関係者が思う博物館の役割と、博物館とは何の関係もない人々が思う博物館の役割とは齟齬があるような気がしてならない。博物館とは物を保存する施設である、と博物館関係者は言うであろうが、利用者の大半の人は、おそらくはレジャー施設のひとつくらいにしか思わないのではないだろうか。この認識の差を縮め相互理解に

つなげるには、博物館の意図を広く社会全体に認知してもらうことが重要になってくる。

ではどうすれば広く伝わるのか。1番早いのはバックヤードツアーを何回も行う方法である。この方法では1度に伝えられる人数は少ないが、学芸員が、伝えたいことを自分の言葉で、参加者の理解度を見ながら訴えかけることができる。しかし同時に、欠点として博物館に足を運んだ人、つまり少しでも博物館に興味がある人にしか伝わらない点があげられる。したがって、真に伝えなければならないはずの、博物館に一切の興味がない層（便宜的に無関心層と名づける）には伝わらないため、社会全体への普及という面では効率が悪い。

次に考えられるのはメディアを利用する方法である。これなら無関心層にも伝わるが、マスメディアを通す場合だと面白おかしく編集されてしまい真意が伝わらない可能性がある。また、インターネットでの広報活動も考えられるが、無関心層の中でもインターネット環境が整い使えることが条件になる。

最後に教育普及活動で授業の一環として役割を伝える方法が考えられる。これまであげた中でもこれが一番有効な方法かもしれない。子供と一緒に親も来る可能性が高く、同時に伝えることができるからだ。また、子供のころに博物館に行く経験をすればリピーターになる可能性がある。しかし、少子高齢化が進行している我が国でどこまで成果を挙げられるのかは不透明である。

以上より、どの方法をとっても100%の人が認知してくれるはずはない。ではどこを妥協すべきか。

少なくとも、次世代を担う若年層には浸透させる必要がある。なぜなら彼らはスマートフォンやSNS、またTwitterやFacebookの普及によって、マスコミの報道より口コミ情報に敏感に反応し、しかも得た情報をすぐに不特定多数の人にばら撒いてくれる、いまや歩く広告塔の様な存在だからだ。よって高齢層への普及はある程度諦めてでも若年層を取り込むべきである。

内容は一気に伝えるのではなく、まず博物館は資料を収集し保存する施設であることを広め、次に研究施設であることを広める、と言うように、知ってほしい優先度の高い話題から小出しにしてじわじわと広げていく。ある程度優先度の低い話題は伝えられない上、相当時間がかかるが仕方あるまい。

#### 4. 入館者増に向けての提案

情報発信や教育普及活動によっても入館者増は望めるが、少子高齢化が加速する我が国では他の対応も求められる。長期計画として情報発信、教育普及活動を進めると同時に、短期的には展示にも工夫が必要であろう。

まずは大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館（以下、海洋博物館と表記）と大阪市立住まいのミュージアム 大阪くらしの今昔館（以下、くらしの今昔館と表記）の比較から入館者増大の糸口を探る。ここでFig. 1に海洋博物館とくらしの今昔館それぞれの年間入館者数の推移を示す。

海洋博物館が平成12年開館、くらしの今昔館が平成13年開館とほぼ同時期に生まれた2館であるが、かたや閉館決定、かたや繁盛館と大きな違いがある。どこでこの違いは生まれたのであろうか。

ひとつは館の目玉となる展示に華があるかないかという点である。これは大阪府立近つ飛鳥博物館にもいえることだが、せっかく目玉の修羅を展示しても、周りとの溶け込みすぎているためか、

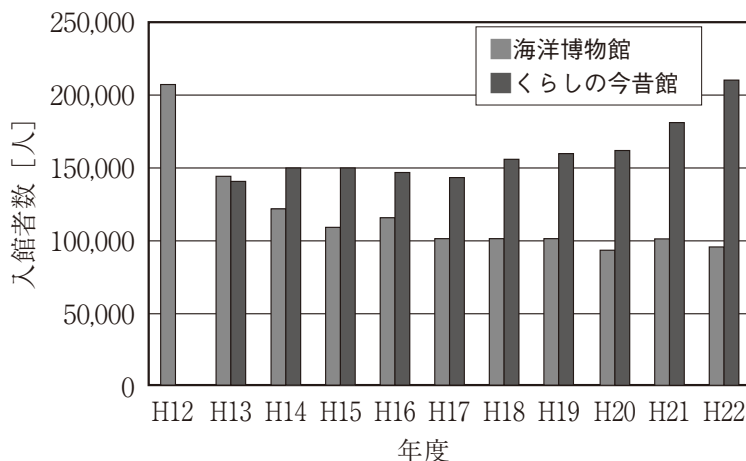


Fig.1 海洋博物館とぐらしの今昔館の年間入館者の推移

飾っているだけの展示方法のせいでは定かではないが、足を止める人は少なかった。どうやって使用していたのかも説明がないので、利用者がああ大きいね、で終わりに残らない淡々とした展示になっているように感じる。海洋博物館にしても、菱垣廻船の復元を展示してあるのにあまり目立っていなかったように思う。またバーチャル解説員にしても結局は映像であるため、何度か行くと飽きると思われる。

対してぐらしの今昔館では、桂米朝師匠が初めて来館なされた時、目玉展示の江戸期の町なみを再現したコーナーでおもむろに町家の座敷に座りタバコを一服しそうになったことがある<sup>(1)</sup>。彼がここまで寛いでしまったのは、屋内ということを忘れさせる緻密な設計と、学芸員やボランティアの町家衆の努力の賜物であろう。事実、展示に季節感を取り入れることでいつ行っても新しい発見があり、町家衆の方々がいろんなことをやっておられるため、何度行っても飽きない。つまり、リピーターを得やすい展示形態を考えそのために工夫しているのである。

第2に子供が飽きない工夫と同時に、大人が見ても発見や感動がある展示をしているか、またうまくボランティアの方々と連携しているかという点である。子供は面白い事に敏感である。ぐらしの今昔館では建築学科出身の館長や、日本建築史を専攻する学芸員が所属しているということもあり、非常に精巧な模型やフィギュアで物語風に構成されているため、見ていて楽しく、頭に残りやすいといえる。

次に内向的になりがちな学芸員の目を外に向けることである。

そもそも歴史系・民俗系博物館だからと、科学技術をふんだんに使わないのは損ではないか。

例えばAR (Augmented Reality) という開発途中の技術がある。日本語訳すれば拡張現実と呼ばれるこの技術は、マーカーを埋め込んだパネルやカードを例えばスマートフォンのディスプレイに画像表示させると、ダウンロードしたアプリケーションによって、あたかもそこに像があるように見えるようになるもので、海外ではIKEAがカタログに採用している（日本語版は対応せず<sup>3)</sup>）。

この技術を展示に応用してはどうだろうか。あるポイントでスマートフォンを向けると昔の暮



らしや合戦の様子がそのままディスプレイに映し出される。またはパネル上に立って撮影すると昔の着物を着た自分が撮れる。臨場感あふれる展示になる上、バーチャルであるため、資料を傷める心配もない。さらに開発途中の技術であるので、ARを利用する場がほしい企業と共同開発すればコストも抑えられるのではないか。

これでは博物館がテーマパーク化しないかという声もありそうだが、特にソフトウェア技術とは日々更新されるものである。いつまでも旧式の格調高さにこだわっていると世の中から置いていかれ、忘れ去られてしまう。その結果、特に若年層に博物館＝堅苦しい、古臭いという固定観念ができてしまうのは今までの議論からも何とか避けたい所である。

## 5. まとめ

以上の議論より、博物館ではよりいっそうの、同時に複数の方法での多くの無関心層に向けた情報発信が求められる。何はともあれ、まずは、博物館の役割を社会に広めることを第1目標とすべきだ。そのためには複数の通信機器を使いこなす若年層の取り込みが不可欠である。

次に入館者の増大につなげる為には、華のある、つまり館の特色を前面に出した目玉展示が必要である。とはいっても、ただ展示するだけではなく、関心を持ち続けられるものにしなければならない。さらに、リピーターを増やすために臨機応変に対応できる、ボランティアの協力が不可欠であろう。また、科学技術をもっと積極的に取り入れてみるのも1つの手であろう。

## 参考文献・URL

- 1) あんじゅ Vol. 49 (大阪市都市整備局企画部住宅政策課刊、2012年1月) p.2～5
- 2) 「博物館に連れてって！ ～産地直送！ 学芸員奮戦記～ 住まいのミュージアム『大阪くらしの今昔館』」  
[http://club.japanknowledge.com/jk\\_blog/museum/sumai/#columNote18](http://club.japanknowledge.com/jk_blog/museum/sumai/#columNote18)
- 3) 「IKEA USA カタログページ」:<http://info.ikea-usa.com/Catalog/>  
統計資料はくらしの今昔館が『大阪市住まい情報センター 平成22年度事業報告書』に、海洋博物館が『大阪市港湾局集客施設担当製作 大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館概要資料』によった。

## 博物館実習における資料借用

11M2030 小田絵理子

### はじめに

関西大学博物館実習展での活動は、印象深い出来事の連続でした。想起される感情も様ざままで、喜怒哀楽のつまった授業となりました。そんな内容の濃い授業だったので、何を題材にしてレポートを書けばいいのかと考えあぐねました。迷った末、自身のなかで、いまだに「あれで正解だったのか、否か」ということが分からず、喜とも怒とも哀とも楽ともはつきりできない、借用に関する過程について振り返りたいと思いました。以下は、自身の実習展における借用過程の整理と反省、および今後のための改善を目的に書き記したいと思います。

### 1. 実習での借用の手順

- (ア) リサーチ（借用品・交渉先の想定）
- (イ) 事前交渉
- (ウ) 書類の作成・梱包の準備・運搬手段の検討
- (エ) 借用当日・調書・書類の受け渡し・挨拶・博物館への搬入
- (オ) 礼状・返却

#### (ア) リサーチ（借用品・交渉先の想定）

話し合いを重ね、展示テーマを「和傘—日本人の心—」に決め、展示物・展示方法の構想を考える段階になって出てきた問題の一つに、展示物の数が少ないというのがありました。そこで、みんながそれぞれに「和傘」に関するモノを借りられるところはないか調べていました。展示したいと思うテーマが決まっても、モノが集まらなくてはどうにもならない訳で、遠回りの多い作業をしながら、借用品とその交渉先をみつけていきました。

#### (イ) 事前交渉

メンバーがそれぞれにアプローチし、私も岐阜県の和傘屋藤沢商店さんと連絡をとり、事前交渉を始めました。事前交渉と漢字4字で書くと簡単ですが、それまで全く関わったことのない方に、自分たちのこと、自分たちの企画している実習展の概要のこと、借用したいと思っている和傘のことを、伝えるということは、神経の使う作業でした。コミュニケーション力の乏しい私にとっては特に困難なことに思えました。正直、緊張の連続でした。「これでいいのかな」と自問することも多々ありました。借用の手続きをしているときは、遠くの陸に向けて、明らかに私の歩幅以上ある谷の上をジャンプしているような気分でした。

#### (ウ) 書類の作成・梱包の準備・運搬手段の検討

電話とメールによる連絡の末、快く貸出を了解していただき、結果としては細かなものを含め49点を借用させていただくことになりました。先方のご厚意で、当初の予定よりも多くのものを貸出して頂ける段階になったときに、借用するものの取捨選択の必要があり、戸惑いながらも、そのときは「みんなの意見を聞く」と「先方への問い合わせ」の往復を何度か行い、内容を詰めま

した。それでも最終的には細かな点に関しては、借用日当日に、現物を確認し決めるということになりました。いま思い返してみると、そういう事態になったときに、大事なことが問われていたのではないかなと思います。例えばそれは、「どこまで企画を具体的に構想しているか」であったり「それをグループ内でどのくらい共有できているか」ということであったり、もしくはその状況に合わせての修正力であったりするものだと思います。

その後、サブリーダーが用意してくれたフォーマットをもとに、「申請内容明細」「出陳承諾書」「借用書」を作成し、梱包用資材の準備の段階にはいりました。和傘の梱包というのは、授業で習った梱包の例から外れるものでした。また、液体や粉末の運搬に関しても、適切な方法が分かりませんでした。借用先の方や先生方にアドバイスをいただきながら用意を進めました。次に、運搬の方法についても、大阪一岐阜間を、借用物を安全に運ぶにはどうしたらいいか、日通の美術品輸送に依頼できれば何よりですが、そういうわけにもいかないので、グループで話し合いました。低予算で安全にものを運ぶということに関して、人によって考え方が違いました。ちょっともめました。ちょっと。

#### (エ) 借用当日・調書・書類の受け渡し・挨拶・博物館への搬入

借用日程は、梱包用品をつんだ車に乗って早朝の大阪を出て昼に岐阜に到着し、挨拶を交わし、書類を手渡し、借用させて頂いて梱包し、自動車に運び入れ、再び大阪に戻り、夕方関西大学博物館に搬入するというものでした。細かなトラブル・戸惑いはありつつも、無事遂行することができたと思います。授業で習った通りに、運搬のために梱包資材を持参していましたが、何十年も和傘を扱ってきた藤沢さんの言葉は、和傘は丈夫なものだから梱包の必要はなく壊れる心配もないというものでした。予定通りにいかないのは、実践の実習ならではだなど思いました。それでも、心配なので梱包しました。こっそりと。

もうひとつの記憶に残るトラブルは、大学博物館への搬入に際して起きました。結論からいうと、大学敷地内への自動車での入構は、事前申請が必要でした。しかし、それをしていませんでした。頭のなかは、借用先への道順や、先方との挨拶や、手渡す書類、運び出す借用品のことでいっぱいになっていました。大阪へ戻る途中、確か彦根あたりで、念のため博物館事務室に電話した際に、そのことが分かり焦りだしました。幸いに、事務室で急きょ申請手続きをして頂いて、なんとか搬入を行うことができましたが、思いも寄らないところにアクシデントが隠れていたと思いました。

#### (オ) 礼状・返却

ポスターとともに同封する礼状の作成でも、学ぶことができました。それまで私は、正式な礼状を書いた経験がありませんでした。調べながら書きました。これから社会（人との関わり）で当然必要になる作法を、実習展を実現する過程のなかで、ひとつ身につけることができたのだと思います。返却の日程は、借用日の日程を逆にしたもので、2度目ということで、初めの借用日より少し余裕のある一日でした。貸出を快く引き受けてくださった藤沢さんに、お礼を述べ、借用品をお返しし、図録を手渡し、書類を受け取りました。どこか寂しいような不思議な気持ちになったことを覚えています。

## 2. よりよい借用のために・反省と改善

- A) 事前交渉・梱包・運搬
- B) 書類・礼状

### A) 事前交渉・梱包・運搬

どのように交渉すれば間違いがないのか。その答えは、実習展が終わったいまでも分かりません。以下の文を参考に考えてみたいと思います。

何よりも所有者が貸し出してくれるかどうか否か、これが問題である。借用交渉である。何よりも交渉にあたる学芸員の人格が問われる。相手に信用されることがなくては、交渉はまとまらない。次に何のために借りたいのか、その理由が問われる。これは、展示の内容そのもので、企画がしっかりしていること、その資料が今回の展示に必要な不可欠であることを納得してもらえるかどうか重要となる。そして最後に、これがもっとも肝心なことであるが、資料の安全が確保できるかどうか、資料の取り扱い、運搬時の安全性が問われる。……貸すか貸さないかを決めるのは、資料の所有者である。

—水藤真『博物館を学ぶ—入門からプロフェッショナルへ』山川出版 2007p115—

借用交渉に必要なものは、①学芸員の人柄、②企画の出来、③展示での希望借用品の必要性、④資料の安全性の確保、だと書かれています。①に関しては、自分の人柄が問われると、どう改善をすればいいのかわかるところですが、信用していただくために、丁寧に礼儀をわきまえて対応していくことが重要なのだと思います。今回の借用では、私たちが学生であったこと、非営利の活動であったことなどの要因で、先方から協力的な対応をしていただけたのだと思います。②についてですが、借用先へ連絡を行った段階での、企画の出来については詰めが甘かったと反省しています。テーマや概要、展示ケースの構成など、具体的に話し合いは行われていたのですが、「和傘の部品のどの部分が必要なのか、～もあるがそれは必要ないのか」等の問いかけに対して、正確に返答できないことがありました。③は、ある程度伝えることができたのではないかと思っています。ただそれは、和傘班のテーマに、岐阜の伝統和傘の抱えている問題と重なる部分が既にあったからでした。自分たちから、ふみ込んで「展示での必要性」を提示することは、今回は達成できなかった課題だと思います。④においては、今回の和傘は少し特殊な例だと思います。美術品や文書などのように、取り扱いが詳細に指定されておれず、先方が「丈夫なので梱包の必要はない」とおっしゃったように、安全性への配慮は、他種の借用品よりも軽度ですみました。ただ、丈夫なものでも故障・破損の可能性はゼロではなく、資料の軟弱な部分を見つけ、その部分を補強するための梱包は必要なことでした。

間違いのない交渉法というものは見つけれませんが、人としての信頼性や展示の企画力、また安全の確保は、借用交渉において必須条件だと思います。

### B) 書類・礼状

借用にあたって、計10枚の書類の作成が必要でした。具体的には、①「ご所蔵品拝借のお願い」

②「申請内容明細」③「出陳承諾書」④「預り証」⑤「ご承諾のお礼状」⑥「ご案内状」⑦「借用通知書」⑧「返却通知書」⑨「展覧終了後のお礼状」⑩「資料調書」です。うち、①—④は見本にそって作成し手渡し、⑤⑥⑨に関しては、メールと手紙で行いました。しかし、⑦⑧⑩に関しては、作成および送付することができませんでした。特に、資料調査に関しては、非常に重要な作業でしたが、点数の多さや滞在できる時間の短さなどの理由に加えて、先方がおおらかな方で、調書は不要とおっしゃったこともあって、作成しませんでした。しかし、いま思い返してみると、時間がない場合ならカメラの使用をするなど、事前に考えて工夫する必要があったと反省しています。

## おわりに

実習展に向けての作業中にくりかえし感じた、「途方もない」という感覚は、不思議に今でも私のなかに残っています。それだけ、みんなで目指した到達点というのは、私個人にとって、逆立ちしても無理ですと言いたくなるような内容だったと思います。けれど、これも不思議なことなのだけれど、実習展は無事に終わりました。私たちなりにひとつの成果を得ました。ひとつの形あるものを完成させることができました。そのことを思う時、私の頭のなかでは、それは「メンバーのおかげ」だという、この一言が自然に出てきます。もちろん、熱心に指導して頂いた先生方、博物館事務室の方々、資料の貸し出しを快く了承して頂いた方々への感謝は、いわずもがなです。一方、ここで書いた資料借用もその一例ですが、私自身の活動に関しては、自省の連続のような日々でした。それでも、実習展での活動は、たくさんのひっかかりを残してくれた実りあるものだったと思います。

最後の授業で熊先生が、「この実習は、作法を身につけるための授業です」とおっしゃっていました。その時私のなかでは、ひとつ何かがつながったように感じました。思えば、借用先に初めてメールした時も、電話した時も、書類を作成した時も、挨拶した時も、礼状を書いた時も、返却に伺った時でさえ、私は常にどこかで「本当にこれで正しいのかな」と自問していて、毎回不安を感じていました。だからこそ、そのことを整理・改善したいと思いレポートの題材にしました。いま先生の言葉の助けをかりて思うのは、借用の過程で感じた不安や自問というのもまた、実習の学びのひとつだったのではないかなということです。自分に、礼が身につけていないことに気づき、それでも実践でどうにかしていかなければいけない中で、メンバーの助けを借り続けながら、先生に指導して頂きながら、自分で調べながら、作業していきました。私自身の作法のあいまいさゆえに、借用過程での作業にもそれはリンクし、不安の連続でしたが、そういう雲行きの中、実習展を行えたことは、ひとつの価値であり、大きな学びでもあったのだと思います。